

座談会



占部、重松、荒川、吉田、高岡、岡元
富川、樋口、皆見、布施、丸岡、岩崎

教室の思い出を語る

—旭・皆見教授時代—

(九大皮膚科・開講50年史に掲載されたものを再掲)

出席者 (敬称略)	皆見 省吾	布施 四郎	丸岡 紀元	富川 梁次	荒川 忠良
	吉田 重春	岡元健一郎	重松 俊	高岡 弘道	
	司会：樋口謙太郎				

昭和30年7月9日 九大医学部恵愛会館

樋口 九大皮膚科教室が開講されて今年でちょうど50周年を迎えることになりましたが、寄附のこと、原稿のことなどで、いろいろ皆さんに御援助をいただきましてまことに有難うございました。それにつきまして教室の思い出などを書いていただいた方もありますが、全部の方から頂戴するわけにも参りませんので、本日とくに関係の深い方々に集っていただき座談会を開いたわけです。実は古い方々にも御案内を出したのですが、お差支えの方もあり御出席願えませんので、お聞きお

よびの範囲で結構ですから、お話したいと存じます。私に司会をしろといわれておりますので進行係をつとめさせていただきます。

旭先生の時代に「わが教室の新築と七年」それに「創立十周年誌」が発行されていて、その中に教室の創設時代のことが書かれているので大体のことが分かるのですが、この2冊を見ますと旭先生が教室を開設されたのが明治39年11月20日となっております。それが今開講記念日になっているわけなんです、当時外科の一部になっていた

というふうに書いてありますが…

丸岡 その頃は非常に狭かったそうですね。旭先生のお部屋は医局の隣で、そこを通られていたそうです。前の日に酒を飲んだりして教室員が医局で休んでいるときなど足を踏まないようにそろそろ歩いて行かれたという話を聞いたことがあります。

布施 それが前の旧館です。

樋口 その頃の医員はどんな方達ですか。

皆見 安部さん、関口さんなどが一番古い方です。

樋口 卒業生の最初はどなたですか。

布施 一回生は蜂須賀、矢沢、小澄、武清、東先生の5人、二回が高木先生、四回が井尻先生、間野先生、徳富先生などですかね。

樋口 それから今の建物ですが、大正元年に起工し、大正2年3月に竣工したといえますから、案外期間がかかっているようですね。

布施 その時に九大の建築課長が大学を出て最初に赴任して来たんですが、建築学を非常にベトネンして、実際の方より学問的にやるんでね。窓のつけ方一つにも議論したそうですよ。材木でも節があるとか水気が多いとかでやかましかった。それが今の外来の建物です。これは階段をみてもわかるように立派なものです。病棟の方は1年後に建ったのに床板がすぐ軟化したんですが、外来では床板の張換えをする必要がなかったですね。

富川 しっかりしてますね。

布施 薬物の石坂先生も横をとおるたびにうらやましがったそうですよ。

皆見 もう一つは安かったんですよ。1年後病棟を建てるときは高くなった。

布施 皮膚科外来、つぎに病棟、そのつぎに耳鼻科が出来たんですが、耳鼻科は皮膚科の病棟よりさらに悪い。建物が低く、見掛けが悪く、見劣りがした。その頃塀がないから外からすぐわかる。久保先生がおこってね、何とかしろというわけで。それで建築課長が上に塔をたてて皮膚科の建物より高くしてごまかしたという話ですよ。(笑) 私が入局してから小児科、婦人科が出来た。小児科は建築ができて入ろうというとき四十何カ所か雨漏りを修繕したとかいっていました。とにかく皮

膚科がもっとも良いときに出来たんです。そのつもりで建物をみてご覧なさい。確かに良いですよ。

樋口 癩の隔離病棟を作ったとか書いてありますが。

皆見 今の学生集会所の所だ。僕が来て病室を拡げるために移動して裏にくっつけたんだ。それから学生集会所が後から出来た。だからあそこは皮膚科の土地なんだが、当時の医学部長が医学部の土地として使ったんで、やかましくいったが、もう後の祭りだった。

布施 その頃は一つの独立した教室の面積がどれ位あればよいか不明だった。皮膚科が規準になったわけです。耳鼻科でもそうです。後で眼科、第二外科が出来たが、やはり大体それを基本にして作ってあります。

樋口 約500坪ですね。

荒川 今の文部省の案では病棟を除けて200坪になってますね。狭いですね。

樋口 では旭先生の話からでも何か。

丸岡 旭先生御自身は聖人のようなお方だったですね。私はお亡くなりになる1年位前まで6年間位お世話になりましたが、弟子をお叱りになることがありませんでしたね。お気に召さぬことがあると、メモ紙にかいて「ああいうことはあまり感心しませんね」という具合にして渡されてましたよ。お叱りにならないからかえって恐ろしかったですね。高木先生の方は反対でね、喜怒哀楽の情がすぐわかりますから、失礼ですが、御しやすいかったですね。(笑) 旭先生は仏教青年会に関係なされていたし、徳があったんだと思います。

皆見 一つはね、土肥先生が大変やかましかったんですよ。回診のたびにヒヤヒヤなんだ。患者の前で叱りつけられるし、実に参っちゃったんだ。旭さんもやられたんですよ、じつは旭さんの三間飛びといってね。(笑) 旭さんは土肥先生の一番の高弟だが回診のとき、やられて三間とんだことがあるんだ。(笑) それをいつか旭さんに、あれは本当ですかと聞いたらニヤニヤ笑っていた。(笑) とくに自分が叱られて弟子が困るという感じがあるもんだから叱っちゃいかんと思って、それが修養になったということも想像されるんだが

ね。

樋口 東大の医局時代の話とか、皮膚科学会の旭先生について皆見先生、話はありませんか。

皆見 土肥先生の部屋と医局とが隣同志でどうかするとヒョコヒョコッと入って来ることがあるんだ。旭さんがウイスキーを飲んでた所へ土肥先生が入って来た。そいつを机のかげにかくして直立不動の姿勢で応答したそうだが、キツかっただろうと思ったよ。(笑) 土肥先生はよく叱る先生だったが、旭先生はおこられやすかったんだね。しかし旭さんが教授になってからは土肥先生も教授として待遇していたようですね。土肥先生はずっと皮膚科学会会頭をやっていたが、京都の松浦さんなんぞ一度もやったことがないのに決してゆづらない。大学をひかれたあと、昭和3年頃止められたんだが、第2代が旭さんだ。僕が岡山で総会をやったときも旭さんが会頭だった。

丸岡 あの時旭先生の懇親会か何かのときの御挨拶は拍手が多くて私嬉しかったことを覚えています。

皆見 非常にうまかったですね。僕が覚えているのは御礼の言葉に「深く深く」と二度いってね。余興に唐傘をもって踊る綱渡りがあったな。(笑) 帽子を被ってステッキをもったのは…

丸岡 それは春雨です。(笑)

布施 岡山から帰って来たとき、聞いたんですが、学会には何度出たかわからぬが、始めから終りまで坐っていたのは今度が始めてだといっていました。(笑) 会頭だったんでね。

丸岡 あれからお帰りになって皆見君は偉いもんだとよくいっておられました。

布施 皆見先生を前においていうのは何ですが、それはそうですよ。「太田君を後任にと思っていたが、学問が少し一方に偏している。皆見君を僕のあとに来て貰えば申し分ない」とそればかりいっていました。とにかく皆見先生は当時の皮膚科学会の若手の日本一だったんですよ。

皆見 そんなことはないよ。(笑) 岡山での総会のとき、当時会頭だったから一番いい宿をとるようにしていた。ところが九大の連中と一緒に二流旅館に泊まれた。仕方なしに宿屋のオヤジに一

番良い酒を用意させておいたが禁酒時代なんだ。それでやむを得ず学会に一日中出ていた。(笑) しかしよく勤めておられた。

樋口 そのほか旭先生のお酒とか、あるいは家庭における先生のお話はありませんか、布施先生。(註 布施氏は旭先生の女婿)

布施 酒はね、富の寿がまだ名前の売れてない前からこれ一本槍でした。いつもコモカブリをおいてあってね。忙しいときは手酌でやっていた。どうせ、井尻さん、高木さん、あの連中がみな飲みに来たに違いない。量よりも楽しんで長く飲む方でしたね。

丸岡 はじめ、アグラをかいで飲んでおられるが、酒がうまくなると気合がかかってくるんですよ。正座して「じゃあ、一杯貰う」とかね。そして段々膝の間が狭くなる。膝の加減で御機嫌如何がわかる。(笑)

富川 私が医局に入ったときには医局が今の私の部屋、旭先生の所がいまのムラージュ室でした。その頃はもう召上っておられなかった時分で、医局で会議のあるときは必ず風洲屋の生菓子の大きなやつを五つ位配って話したことを覚えています。先生は甘いものを召上らないだろうと思っていたんですが、たちまち全部平らげてしまわれたのはびっくりしました。

布施 酒を飲んでるときも生菓子をお召しましたよ。

樋口 大正2年に高木先生が助教授になっておられますが、高木先生について何か。

皆見 とにかく日本で初めての泌尿器科の教授だ。その点は非常に優秀だった。

富川 第一次世界大戦のため欧州にいけなくて、アメリカに行かれたとお聞きしていますが。

布施 そうでしたね。

樋口 随分オシャレになって帰って来られたそうですが。

布施 ええ、赤いネクタイなどして来られてね。(笑) 医局の写真をみてもわかりますよ。あいう方が晩年はバンカラになられてね。

丸岡 高木先生はね、廊下を歩かれるときはいつもひとりごとをいっておられた。勉強のことでし

たよ。ところが教授になられてからスポツと止まってしまった。(笑) しかしとにかく天才的なヒラメキがありましたね。痰壺をつくって新案特許をとられたりしてね。(笑) いつだったか靴の底に下駄の歯と同じように二本の皮をはめさせましてね。靴屋が驚いて「先生、何になさいますか」と聞いた所が「雨降りには靴がふやけて靴下が濡れるじゃないか」と。(笑) しばらくはいておられましたよ。

布施 同時に背が高くなるからではないですか。(笑)

荒川 井尻先生と歩かれるときはいつも道の真中を歩いていたとかお聞きしていますが。

布施 井尻さんは知らずに端の方を歩いている。(笑) そこは高木先生、頭がよい。

樋口 いろいろ話題はつきないと思いますが、旭先生時代の面白い研究面としては、玄華の話が有名なのですが、これを一つ。

布施 あれはね、ツンツ博士でしたか動物の爪をとかして薬に使っていたのにヒントをえたんですよ。旭先生が床屋で散髪をしたとき髪の毛をミカンの肥しにしているのを聞いて、髪の毛は人間のものだからツンツの薬よりよかろうというわけでやりだしたんです。はじめは薬局長の所に色々聞きにいったりして、とにかく形ができ、名前をつけることになった。紀州の南方とかいう学者に、髪の毛の神様の名が玄華ということを知り、その名をとったとかいう面白いエピソードもありました。

吉田 玄華という名前はありませんでしたか。

布施 それは後からだ。僕は医局に入ってたまま手伝うことになったのですが、粉にしたり、煮たりして、アロペチーの患者に1週間分ずつやる。段々患者がふえましてね。次の年には新潟の学会で北原さんと発表したこともありますよ。僕は農学部で成分をしらべて、チスチンを99%位までに精製しました。チスチンだけでも使ってみました。玄華を使って白髪が黒くなったこともあります。僕自身もフケが多くて使ってみました、フケはよくなったが胸のうぶ毛が所々濃くなってね。思わぬ所の毛が長くなるんですよ。(笑) とにかく

玄華は効かないとはいわないが、しかし好きな所に生えない。目的通りには効かん。(笑) その後旭先生も年をとられて、薬屋が作るようになって玄華という名前になったんです。塩酸塩が玄華なんです。燐酸塩となったのが旭華なんだ。結果は同じだがね。それから色々問題があって手を切ったんです。今作りたい人は誰でも作っているんです。

樋口 あの頃の外来日誌はみんなアロペチアですね。

丸岡 水曜日がアロペチア・デーでしたね。一日300人位きていた。

樋口 その当時サルバルサンが入ってきたんで、皮膚科はとくに関係が深かったと思いますが。

皆見 僕が東大に入局したときはみな稀釈注射というのをやらされた。小さいコルベンの中に溶かして、それをイルリガートルの中に入れるんです。アルカリで中和して注射するんだが、とにかく面倒くさいや。

重松 背中には刺さなかったですか。

皆見 それはもう一つ前だ。

吉田 筋肉に刺したんですか。

皆見 いや僕らの時は静脈だ。旧サルバルサンだ。しまいにはネオが入って来たし、面倒くさいから旧はなくなったね。

樋口 九大はエラミゾールでしたね。

布施 ヒソリンじゃなかったですか。

樋口 ヒソリンというのがあったんですか。(皆見氏に) 先生が来られてタンワルサンですか。

皆見 うん。

樋口 値段も随分たかかったでしょう。

布施 あの時分で8〜9円ですからね。オサルコゲルドというのがありましたよ。

樋口 オサルコゲルドですか。

布施 サルバルサンで入ったゲル。(笑) 多少お酒の方にも廻ったらしい。(笑)

樋口 ほかに何か旭先生時代の話題はありませんか。

丸岡 私が入局して1カ月後初めて当直したときですがね。14才の子供がウェルホーフ病で入院していたんです。そうしたところ10時頃から鼻血が

出るやら、血尿などでどんどん出血しはじめました。まだ入局1カ月位で苦勞しましてね。とうとう思い余って旭先生が病気で休み中を電話したんです。来て診て頂きまして、とても嬉しかったですね。後で三木さんなど3、4人来てくれましたが、「開闢以来だぞ、旭先生を夜中に呼び出すのは」といってオドかされましたがね。旭先生は私達に「皮膚科の医者というのは骨董屋だ。だから沢山みて骨董のくせ（くせというのは症状ですね）を知ることが大切だ」といわれておりました。

布施 「診断で僕は一寸みてわかる。しかし一寸みてわかるようになるのは難しい。君らは一人の患者を5分間以上みろ」とよくいわれたが、成程よくみていると、今まで見えなかったものがいろいろ見えて来ます。

樋口 本を出されていますね。（布施氏に）あなたと一緒に。

布施 あれはね、旭先生がはじめつくっていたのがもう古くなったので、それをちょっとなおして、私が少しつけたして、金原から出版したんです。

皆見 山田弘倫さんと共著で出したものですか。

布施 そうです。旭の死後、浅見さんと山田さんの共著とした。泌尿器科だけのがありますよ。

樋口 旭先生は美容講座も随分やられているようですが、あれはどういうきっかけでやられたんですか。

布施 あれは晩年です。洋行前からその気はあったらしいんですが。一つは自分の顔も少しはキレイになりたかったんでしょう。（笑）

皆見 本当にやる気になられたのは二度目の洋行後で、パリでいろいろの器械を買って帰っていますよ。

布施 美容の講義もやっています。

樋口 今度美容皮膚科学会を作ろうということになっているんですが、旭先生、なかなか先見の明があったということになっているんですがね。

布施 美容ってはいかんというんです。美しくするのは美容師のすることで、われわれは顔を整えるんだから整容といわねばならないです。整容講座でしたよ。（笑）

樋口 そのほか井尻さんなどの話題は。

丸岡 井尻先生は体が大きく、とても勉強家でした。高木先生はまた負ん気で、両方で張り合って勉強していましたね。

樋口 旭先生のおなくなりになったのはいつでしたか。

布施 昭和5年1月です。昭和4年に支那に旅行されて、船で漢口にのぼる途中工合が悪くなり帰ってきたんです。それで風土病かも知れんということになってね。主治医は中島良貞さんでした。見当がつかなかったんですな。時々リンパ腺が腫れるんです。ゼクチオンのとき田原先生は結核だろうかということで、レーバークレープスの診断がつかなかった。スチュックでクレープスとわかった。

富川 あの時金子先生、小野寺先生、中島先生、三人の意見が違ってね。細菌の小川先生がプンクチオンまでやられた。僕がちょうど入った年でした。

布施 ゼクチオンのときはアシスタントがいなくて、僕が仕方なしにやったんですよ。あれだけ飲んでいたのでマーゲンはどうもなくてね。ビックリしましたよ。

丸岡 先生が自宅で治療されているとき、自遠会（九大皮膚科同門会）か何かの懇親会が片倉ビルの7階でありましてね。先生を御案内したところ、僕も出ようといっただけで来られました。その頃とてもやせておられたんですが、本間助教授と私がかかえるようにしてつれて上ったんです。途中5階位で息をついて、窓から外を見下しながら、「ああ、僕が福岡市をみるのもこれが最後だろうな」と述懐されて、それからまたそろそろ昇っていかれました。これが宴会の最後だったと思います。

高岡 私の父は大変旭先生に心服しておりましたね。旭先生の胸像を床の間において、なくなられて暫くは時々その前に坐ってうつむいて涙ぐんでいたのを覚えています。

樋口 旭先生時代のお話はつきないと思いますが、皆見先生時代に入りましょう。先生、来られた第一印象というものから一つ。

皆見 どうもね、ボクは…。昭和6年4月に来たんだが、その前岡山にいたとき田原さんが来て、

いきなり来ないかといわれて面喰った。岡山にもっとおればね、42才でもう一度洋行できることになってたんだ。はじめの洋行はデンマークまでいったが、ノルウェー、スウェーデン、スペインなど2回目に行こうと思って残してきたんだ。実は岡山に少々いや気がしていたこともあるがね。

ところがね、来てみると月給が一級下げられているんだ。これにはちょっと驚いたね。それまで高木君とも余り話したこともないし、医局の連中も知らなかった。マア、本間君と鋤柄君を岡山の学会で知っていた位だ。誰も知らんでしょう、何だか心細い気もした。

当時の院長は赤岩君で、これは岡山でよく知っているし、それから金子君、庄司君も知っていたからその点は都合よかった。ことに赤岩院長は僕が来たために大分努力してくれました。レブラの病室にあてがっていたのをこちらに持ってきたり、それから看護婦も皮膚科と泌尿器科にみんなわかれた。どうしてもわけられんものは共同物品として残したが、それはまたいいこともあった。予算も全部皮膚科と泌尿器科別々にわけた。ところが残る問題が医局員なんだ。仕事の都合などで困ることもあるから、医局員も別れたらどうかといったこともある。その時僕のところには助教授がなかった。当時本間君が助教授だったんで、古賀賢二君を有給講師にして医局をわけるようにした。ところが医局じゃ恐慌を来して、一緒にやらしてくれといってきた。僕としては1年とか2年おって代るようにしたらどうかと考えておったんだけど、早く医局を出ていく人もあり、そのままになった。もう一つね、僕が来たために有給助手が2人ふえて4人になったんです。少しは得したわけなんですがね。それでマア一雰囲気というものか、わりあい気持ちよくやれた。問題は高木君との関係だ。初めは困った。しかし氣質をのみこんでからは、そう問題もなくやれた。皮膚科は金が少くて、セビリに行ったこともある。それで深部治療やシャウルが出来、共同物品になった。

それからはマア一何とかやって来たようなわけさ。あとは諸君に任すよ。

樋口 皆見先生時代になってからの教室の思い出

とか、在局中の話題とかいうようなものを。

皆見 僕がいらない方がいいんじゃないかな。(笑)

荒川 樋口先生が一番はじめですね。

樋口 講義をはじめから聞いたのは僕達が最初です。

皆見 僕が来たときはね、古賀賢二君、宮崎守作君、富川君、大橋君、伊藤嘉夫君らがいた。

荒川 先生が来られたところは玄関の上の光線室にいつもおられたと聞いていたんですが。

皆見 あれはずっとあと。あそこはね、鳥の糞が一杯あって汚なかったけれども気持ちがよかった。とくに春、日光浴にね。僕の部屋は暗くて陰気だもんで、あそこへ上って本を読んだり顕微鏡をのぞいたりしていた。

岡元 僕はああいう部屋があるということだけ伝説的に聞いてただけで、知らなかったですね。

樋口 どうです皆さん、皆見先生はこわかったですかね。

荒川 こわかったですね。(笑)

布施 こわいという評判だったですよ。(笑)

高岡 皆見先生がいらしたとき、父から聞いたんですが、旭先生のかわりに今度良い先生が来れたとって大変喜んでいたので覚えています。

皆見 僕が来たとき一方亭で歓迎会をやってくれた。そのときムクツケキ男が坐っているの、誰だといった所がそれが高岡達也だった。あれが準備委員長で歓迎の辞をやってくれた。

荒川 入局するときに条件を先生に出されましてね。覚えておられますか。

皆見 アア、看護婦にサワツチャいかんという。

荒川 看護婦と仲良くならないこと、昼休、放課後以外はピンポンをしないこと、当直室へ出入しないこと。

樋口 僕達にはいわれなかったよ。

吉田 (荒川氏に) それはあんたが危いと思われたからだよ。(笑) 私はその当時は皆見先生を一つも知らなかったんですが、思ったより先生が純真だった、といっておかしいんですが、そのような印象をうけていい先生についたという感じでした。高木先生にはオヤジと思っていたから甘えておったんですが、いつも叱られてばかりいまし

た。こわいこわいと思っていた皆見先生がちっともこわくなく、非常に優しくったんですが、その先生までも一度おこらしたことがあるんです。わたしがルーズであつたし、わがままであつたかも知れませんが。

皆見 何を怒ったんだい、それは。

吉田 忘れっちいましたよ。(笑)

樋口 重松君はどうですか。

重松 私が始めて先生にお会いしたのは就職のことで、先生がちょうど耳鼻科に入院なさっていたときでした。その後釜山に就職し、昭和11年4月より教室に参りました。先生は今でもこわいですね。

布施 九州皮泌科集談会は皆見先生がつくられたんでしょう。

皆見 私が来てからすぐ、昭和6年が第1回でしょう、多分。あれは高木君と相談して、長崎の駒屋、熊本の三宅教授との話合で決めた。ただ九州医学会があつたのでその分科会と合同した。

樋口 皮膚と泌尿の発刊の動機とか、いきさつとといったものを。

皆見 動機はなんだったかな。高木教授に相談して何とかだそうという話になった。

樋口 基金は。

布施 あれはね、皆見先生が勉強家だし、何か雑誌を出したいと高木先生から話があつたんです。高木先生は旭のなくなったときの香典かなにかの金があるのをちゃんと知ってたんです。それ出してくれたら雑誌を出そうといわれて、私も母(故旭教授夫人)に相談したんです。私の父(故旭教授のこと)もね、山田弘倫さんらと皮尿誌を最初に土肥先生の洋行中に作って出したんです。そして土肥先生が帰ってきて、「これは俺がすべきだ」と思いきり叱られてね、(笑)資金集めは自分たちで苦労して、叱られたあとは土肥先生がずっと同じ事をやってきた。(笑)そういう風に雑誌を作りたいという気持もあつたんで寄附したようなわけです。

樋口 最初の編集は先生は随分苦労されていたようですね。校正なんかずっとやられていたようですが。

皆見 最初の頃2、3年ははじめから終いまでずっと校正をやった。医局員に抄録をさせたんだが、結局赤字ばかりではじめの約束の抄録を作るアルバイト代は終いまで出せなかった。そのかわり雑誌を一冊ずつやるということでごまかした。編集員にははじめ古賀賢二君、あとから富川君、樋口君、荒川君。終りには面倒臭くなって、校正はみんな著者にやった。

荒川 大変だったでしょうね。

皆見 ウーン、ちょっときつかった。

樋口 抄録の書き方で上手だ、下手だと大分いわれましたよ。時にはほめられたこともあるけどね。

荒川 いいときは何もおっしゃらなかった。(笑)

樋口 総会をやられたのはいつでしたかね。

皆見 昭和14年。

樋口 あの時は沢山来ていたようですね。新三浦で先生、秋の夜かなんかやられた。

重松 そう、そう。

岡元 私は教室で在局期間は短かつたんですが、兵隊に行くまで皆見先生が酒を飲まれることを知らなかった。(笑)医局の会に出て来られて中洲の料亭で宴会があつたとき初めて先生が酒を飲まれることを知りました。もっとも逃げて廻ってなるべく顔を合わさないようにしていましたがね。(笑)

樋口 酒の話が出たんですが、九大の皮膚科は昔から強いという評判ですがね、どこへ行っても。

重松 皆そういいますね。

樋口 旭先生時代から、高木、皆見、富川先生と。僕だけがどうも。

布施 しかしね、昔の医局というのは面白かつたんですよ。昔の病院で当直するときは皆チビチビ飲んでいて、酒がなくなると回診衣の下に一升瓶を入れて、他の医局に行って少しずつわけて貰うんだが、各医局を一廻りするうちに一杯になったんだそうです。そしてチビリチビ飲んで当直していた。どこでも飲んでいたんだが、皮膚科が飲みっぷりがはでだったんですね。

樋口 酒豪がいたね。昭和10年組、荒川、堅山、津留、それに西君か。ところがね、最近はもっと強いのがいるんだ、三人組でね。(笑)

重松 賀来恕助さんがよく飲んでたじゃないですか。

樋口 皮膚科も色々の事件が起ったでしょうけれども、どうですかね、ラジウムのなくなったような話。

皆見 ラジウムは一度なくなったかな。あれは用心せにゃならんのは看護婦ですよ。ラジウムにガーゼをつけたりしているとそのまま汚物籠に捨ててしまうんでね。焼却場で探し出したことがある。

富川 灰の中にありましたね。

荒川 皆見先生がやめられて、樋口先生が来られる前、あの時は心配しました。

皆見 その頃は今のガイガーがなくてね、探すのが大変だった。

樋口 戦争のときの状態ですがね。大変御苦労なすったようですが。

皆見 戦争が始まって、福岡の空襲前に僕は院長をやめたんです。その時に大きなコンクリートの土管を3本埋めてね、それには3人入れるんだ。そのほか旭先生の銅像の下にも一つ防空壕を作った。コンクリートのヤツが一番安全なんだけどね。どういうわけか、いつも銅像の下にばかり入っていた。

富川 土管には先に研究員などが入っておりましてね。

皆見 ああ、そうそう。いつも富川君と二人で鉄カブトをかぶって入っていた。こわかったね。(笑) あときは医局長は古賀公吾君、教室員も少いしね、4、5人だったかな。それから困ったのが九大の疎開です。朝倉村の小学校へ教室のものをみんな持っていった。レントゲンなんぞは実際持って行って損したんだけどね。

ちょうどその前に久留米の参謀長が皮膚病で来てね、それに頼んで兵隊とトラックを貸して貰い、そこら辺の陸軍病院の出張所に運んでそこにいたままだった。

僕は自分の家は焼かれてしまったし、朝倉村の

村長がね、荷物ばかり運んで、来るのやら来んのやらわからんというんで、僕は家族を引き連れて、富川教授のお子さんも一緒だったんだが、向うで家を探すけれどもなかなかなくてね、向うに行ったり来たり、途中で敵機は来るしね、こわかったね。富川君はこちらにいて助かったんだ。

そのうち終戦になって、荷物をこっちに持って来ようと思うんだが兵隊が解散していないんだ。そこへまた参謀長がエリジペラスで入院したんで、(笑) レントゲンを何とかして呉れと頼んだ。少し残ってた兵隊がトラックに積んで持って来て呉れたが、そのかわりどれもこれもガタガタだ。なんとか修理してかろうじて使えるようにはなったがね。ムラージュなどは内科や法医の地下室に入れた。天井にも入れたな。

富川 あれはまだあのままですよ。

荒川 土の中に埋めたものは随分グニャグニャになってしまいました。あれはあとでローソクにしました。あの当時ローソクがありませんでね。

樋口 まだ色々お話は尽きないと思いますし、またワッセルマン検査室とか、ムラージュの話とか、そのほか医局の恋愛事件とかいろいろお聞きしたいこともあるんですが、予定の時間が参りましたのでこの辺で終りたいと思います。

皆見 今度は樋口君の話をちょっとしなきゃいかんじゃないか。(笑)

樋口 いやそれを実は発言しようと思ったんですが、私、今日は大いにしゃべるつもりで計画したんですが、幹事から、進行係をやれということで、しゃべる機会を失ったのですが、これはまた別の方法で発表し、責を塞ぎたいと思っています。

吉田 うまいことごまかしよる。(笑)

樋口 いずれ、本日の内容は50周年の記念出版を飾る読物として載せたいと思います。どうも有難うございました。

(文責 占部、坂本)



旭、北村、占部、岩崎、利谷、中溝

開講百周年記念座談会 —樋口教授時代—

出席者 中溝 慶生（昭和22年卒）・占部 治邦（昭和23年卒）・岩崎 博（昭和24年卒）
（敬称略） 利谷 昭治（昭和27年卒）・北村 公一（昭和38年卒）
司会：旭 正一（昭和36年卒）

平成18年1月18日 割烹「初根」

旭 今日、九大皮膚科開講百周年記念の座談会でお集まり頂きました。岩崎先生、北村先生には遠隔地からのご参加、有難うございます。本日は、樋口教授時代の医局の思い出を、いわば正史に対する裏話みたいな感じでいろいろ話していただきたいと思います。

まず樋口教授の赴任当時のことから始めましょう。樋口先生が久留米から九大にみえたのが昭和23年10月ですが、そのころの事から。

岩崎 私がちょっと出だしをやりましょうか。私は昭和25年に入局したわけですが、インターンで大村国立病院でしましてね、奥野先生が皮膚科の

主任でしたが、前任の皮膚科部長の樋口先生時代のお話を聞く機会が何度もありました。皮膚科というのは居心地がよさそうだなあという感じで、皮膚科へそのまま入局しました。野間先生が医局長で、私は4月に遅れて入局の申し込みをしたら、野間さんが、いや、入局の歓迎会が明後日か何かにあるから、すぐ出てこなきゃ間に合わんと言いました。その日に歓迎会。当時はまだ物の不自由な時代でしたが、ビヤ樽2つぐらいありましたね。玄関入って右側の2階の大部屋が会場でしたが、そこで大騒ぎをして、そのまま宿直室にもぐり込んで寝た覚えがあります。これはええとこじゃな

あというのが私の初印象で、そこから昭和31年までお世話になったわけですから、私らにとっては、あの木造の教室というのは、忘れられないところです。ウロとデルマのUとDの字が扉の上にあって、がっちりとしたすばらしい建物でしたね。医局長の野間先生から、ここへ配属するというので行かされたところが、一番奥の、後のピルツの研究室でしたね。当時は北村憲一先生が再帰熱のスピロヘータをマウスに接種して、それにペニシリンをやって、毎日尻尾を切って血中のスピロヘータの数を見ておられました。夜になると合成酒なんかを持ってきて飲まされるというぐあいで、だんだん酒量も増えてきました。占部先生は当時九大の温研に出張中で、6月か7月に初対面でしたが、占部先生の机も同じ研究室にありまして、この人はすごいんだ、いずれプロフェッサーになる人なんだと当時から格別の感じでしたね。そのころ樋口先生は、外来を悠々たる親分の調子でやっておられたんですが、まだ弘中先生とか、野間先生とか、皆見先生子飼いのベテランの弟子がいて、そばに立ってずうっと見るんですなあ。そして大きな声で何やかや言うので、樋口先生もだいぶ緊張しておられたという話を、後に聞きましたね。私自身学生時代には皆見先生の講義を聞きました。階段教室は寒かったですね。皆見先生も冬になると首巻をされて、寒々として講義をされておりました。

旭 占部先生や中溝先生は、まだ講義は皆見先生でしょう。

占部 私どもは講義は皆見先生で、卒業試験は荒川助教授の口頭試問でした。

利谷 私はもう樋口先生ですね、皆見先生の講義は聞いてません。

旭 じゃあ、樋口先生の講義を聞いたのは皆見紀久男先生あたりからでしょうね。

中溝 僕らは卒業試験が皆見先生ですよ。皆見先生の卒業試験のとき、グループ別にくじを引くわけです、10人グループ。だれか代表がくじを引くと梅毒の治療とか書いてあるわけ。すると、だれか一人がべらべらしゃべったら、はい、よしで終わり。

旭 つまり口頭試問ですね。筆記じゃなくて。

中溝 筆記じゃない。グループのだれか一人がしゃべると、ほかの人は黙っていても、もういいよ、ドンタクへでも行きなさいということになる。ちょうどドンタクのころでね。

旭 今の学生が聞いたらうらやましがりますね。

中溝 僕らのころは皆グループで行って、一人がしゃべったらそれで終わりですよ。一人一人というのはないです。ウロは卒業試験があったですね、富川先生。そして、君は試験はできとるけど、学校に来てないと言われた。僕は戦時中に焼け出されたからね。もう下宿もないし、戦後は大学にあまり行かなかったです。

岩崎 我々の入局のころを含めて、もう生きるために必死な時代だからね。住むところと食うものを確保するのが先決。

中溝 焼け出されて、物もない、本もない、聴診器もない。それで船に乗ったね、引き揚げ船にね。

岩崎 引き揚げ船でのアルバイトも多かったね。それから、薬理の教室とか細菌の教室とか、地下室に入り込んで住みついていたね、私どもの戦後は。

旭 そのころは、皮膚科と泌尿器科は、もう中で画然と分れておりましたか。

岩崎 いや、分れてない。だから、ウロの患者も持たされましたね。

旭 入局した人を、この人は皮膚科、この人は泌尿器科というふうにはっきり色分けされてなかったですか。

岩崎 両方の教室に入局するという形で、ただティータルのテーマをどちらからもらうかというのが、ある程度の目安にはなったと思いますね。

北村 旭先生はウロの患者を持たれたんですか。

旭 私は昭和37年に入局しましたが、まだ泌尿器科の入院患者を受け持ちました。ただ、皮膚科の者には一人しか持たせない、手術のとき執刀はさせないということで、ウロの人より大分負担が軽かった。膀胱鏡や尿管カテーテル挿入なんかもやりました。私あたりが膀胱鏡をした最後の年代でしょう。

北村 私は昭和39年ですけど、全くウロの外来も

行きませんし、入院患者も持ちませんでした。

岩崎 それは制度が完全に変わったわけですか。

旭 百瀬教授に代わってから、皮膚科とは切り離そうという方針を明確にされたようです。

北村 私はそういうことを全然知らずに、いま先生がウロを持たれたと初めて聞きました。

岩崎 私らは、患者に関しては平等に持った。ただ、アルバイトのテーマが違うということだけで。だから、皆さん貴重な経験をされた。僕らのときはね、泌尿器科の外来処置は、もうほとんどが尿道洗浄。まだ抗生物質以前でね。それと膀胱鏡の二つ。植松君はまだ先生らよりも上かな。

旭 植松先生は私より六つ上です。

岩崎 彼の書いた随筆に、泌尿器科と一緒にやったので、尿に対する嫌悪感が全然ないようなことを書いており懐かしかった。

旭 私は1年目で山口日赤に出張に行って、部長は中溝先生でしたが、ああいう出張なんか、皮膚科と泌尿器科からかわるがわるに行っていました。だから、私の前に泌尿器科の相戸先生が行ってたりするんですね。しかしこれも2、3年後には、皮膚科だけということになりました。

岩崎 日本でウロとデルマが別教室になったというのは、3番目かな。

旭 高木先生が日本で最初のはずです。

岩崎 高木先生が1番だったんだけど、教室内部ではそれほどはっきりしてなかった。

旭 教授ははっきり分かれていたが、教室員がそう画然と分かれてなかったみたいですね。

岩崎 まあ、妙なぐあいですよ。看護婦長は別だし。

岩崎 富川先生が、岩崎君にもそろそろテーマをやると言われてね。

利谷 入局したその日に樋口先生の部屋に行くと、今岩崎君が忙しそうにしていると、ピルツをやんなさいと言われました。それから、隣の富川先生の部屋に行って、尿路結石の溶解に関する資料と、テーマを2つもらってきました。すると先輩に、そんなことしたら、おまえが後で苦しみにゃいかん、一つは返してこいと言われて、困ったなど

思ったけど、やっぱり行きましたよ。そしたら、富川先生の顔色が変わられたけれども、大きな声を出すということはありませんでした。

岩崎 医局で過ごすうちに、自然に色分けができてきたようですね。夜は富川先生に付き合う。

利谷 私は昭和28年だけど、ちょうど皮膚科学会総会を担当された時で、総会が済んでやれやれというときに、私が入局のご挨拶に行ったんですよ。そのときに樋口先生と富川先生と、教授室を先に回りました。医局長を飛ばして、すうっと行っちゃったんですね。後で怒られました。

岩崎 あのころは、医局長の権限というのは絶大でしてね。もう関連病院を含めた人事権は、まづプロフェッサーには出さずに、医局長ですよ。

旭 医局長が会計を握ってたんでしょうね。

岩崎 当時、熊本で繰糸糸をする女工さんの皮膚炎がありました。繰糸皮膚炎というんですが、樋口先生がある日、その調査に行け、わしも付き合うという話になりました。北村医局長が、プロフェッサーと一緒にだからと言って、随分金をくれましてね、それで前の晩若者と飲み上げて汽車に遅れたんですよ。慌てて熊本に着いて、その会社へ行ってみると、樋口先生がじいっと渋い顔して1時間以上待つとられるわけですね。何しとったんだいとか言われた。1週間ぐらいして松田君が、あんた樋口先生を待たせたげななあ、前代未聞ですばいと言いましたね。麻雀でぼやかれたそうです。

旭 昔の文章を見ますと、樋口先生はとても怖かったと皆さんが言っておられます。私はもう樋口時代の後半の入局ですが、怖いという印象を持ってないんですけど、古い方と大分違うみたいですね。北村先生もそう怖くなかったでしょう。

北村 怖いことは怖かったけれども、聞いているほどではなかったですね。

旭 声を荒らげて叱りつけるというようなことはなかったけど、むっつり黙っておられるので、近寄りにくくて怖いということだったようですね。

岩崎 麻雀のときは饒舌だったそうだけど。

旭 怖くて教授室で物が言えないという人がいた

そうですが。

岩崎 震えて、すくんで帰ったというのが結構おったもんね。

占部 そう、先生が久留米大学から来られて最初のころのお弟子さんじゃないかな。

岩崎 先生の奥さんは、樋口は体調がよくないもんでございますから、余り進んで物を言わなくて、先生方にご迷惑をと、いつも言うておられました。

旭 奥さんは怖くないんだということを強調しておられましたが、教室員とは少し話が違いますね。(註：このような問題について関心のある方は、次の文献をご参照下さい。

「座談会：樋口謙太郎先生を偲ぶ」西日本皮膚科、第57巻3号、540～549ページ、平成7年)

利谷 私は教授室をノックするときから、かなりストレスがあって、樋口先生に、10ヵ条くらいのお願いがあったんですが、5つぐらい言ったら、まだそこにおるのかというような顔をされたんで、すごすごと回れ右して帰ったんですよ。結局あとの5つは言いそびれたんです。とにかく半分しか言えなかったという思い出がある。それを奥さんに言ったら、まあ先生、そんな怖いことないですとおっしゃるが、奥さんは怖くないでしょうが僕たちは怖いんだと。

旭 黙っておられるので、とっつきにくくて怖いんですね。

中溝 利谷先生が、樋口先生と一緒に熊の川温泉に行ったでしょう。そのあと古湯に行って僕のところへ来て、古湯から佐賀駅まで一言も樋口先生はものを言われぬ。もう体がこわばったね。

利谷 それでも、樋口先生と一緒に別府に行ったときに、汽車の中でお昼になったんですよ。すると先生がすすすすと向こうに行かれて、弁当を二つ買ってこられた。一つは私の分でしょう、恐縮しましたね。

旭 名簿を見ますと、あのころから毎年の入局者というのは、毎年3人以内みたいにみえますが。

北村 以前はすごく医局員が多かったという話を聞いていますが。

岩崎 私たちのときは多かったんですよ。その年

10人ぐらい新入局者がおりましたかね。関連病院の在籍者を含めると、結構多い感じでしたよ。

旭 戦時中はすごく少なかったんですね。兵役にとられたりということがありますから。皆見先生が、数名しかいなかったと言っておられます。

岩崎 関連を全部含めると私どもの頃100人近い人数がおりましたね。

旭 100人とはすごい数ですね。

岩崎 ただ大部分は学外の人で、学位のテーマをやって、ときどき来るという研究生ですね。教室内の在籍は20人くらいじゃないかな。その中で有給が10人くらいですか。

利谷 ちょうど私たちが昭和28年に入局して、その後、ばたばたと辞めて、就職されたりしました。それで私たち当分助手にはなれっこないと思っていたのが、割にスーッと行ったんですよ。

岩崎 あなたのときの助手の給料はどうでした。

利谷 いや、安かったですね。

岩崎 私らのときは、5、6千円ぐらいかな。それをまた医局で振り分けて、そのまは入ってこないという格好でしたね。最終の講師になったところで2万円程度あったかなあ。

旭 それで食える額ですか。

岩崎 山口日赤に行ったら3万何千円かになりましたよ。これはすごいところじゃなあという感じでした。

利谷 樋口先生がそのぐらいでした。医局費とかを徴収する医局係というのを私も半年ぐらいやっただんですが、先生の給与から医局費を先に抜くわけですよ。そして、残りを先生に差し上げる。

岩崎 大してありゃせんよ、もう。だから、あのころよく食べたと思うね。

利谷 富川先生が4万ちょっとで、樋口先生が3万ちょっとというような金額でした。

岩崎 昭和30年代の後半ぐらいですかね。利谷さんの時代には、もう大分よくなったよね。

利谷 まあ家を維持して、飯を食えるというぐらいですかね。

中溝 この人は温研に研究に出張してきたが、金がないから入院させてくださいと、保険証を持ってきた。湿疹と言うことで入院患者になり、病室

から温泉地へ研究に行った。医局長から出張旅費ももらってきてないと言うから、それはひどいなあと言ったんだが、それでも毎晩飲みに行ったね。

利谷 その後四国に行ったんですよ。それは泉浴の、いろんな機能を調べてこいということで。

岩崎 当時の温研はね、九大の皮膚科から見ると、半分は逃げ場みたいなのところもあったし、非常にゆったり暮らせるということで、逃避場になった。

旭 温研は大正時代からできてますが、正式に皮膚科ができたのは樋口先生になってからですね。樋口先生が宿題報告されるのに、温研でかなり温泉の研究をして。

中溝 そのために僕が行って、この人も来たんです。

旭 それがきっかけになって、温研に皮膚泌尿器科ができたと書いてある。

占部 いやその前から、間野山松先生がおられた。

旭 間野先生などが行って、皮膚科の診療をしておられたけど、皮膚泌尿器科という科は表向きなかったみたいですね。

中溝 僕が行ったときでも、まだ外科の中の助手でしたよ。それで、僕が腎摘したらね、外科の助教授、樋口先生と同級生の荒牧先生が助手について僕はやりにくい。それで、手術はもう止めてベッドを空けて、泌尿器の患者は入院させなかった。

旭 樋口先生のその宿題報告が済んでから、温研に正式に皮膚泌尿器科ができて、伊藤先生が赴任されたんですね。そのいきさつは医学部100年史に全部書いてあります。

中溝 昭和31年4月に二日市で宿題報告をされたのよ。そのあと昭和31年秋に温研の皮膚泌尿器科ができた。

岩崎 梅毒の宿題をされたのはその前ですかね。

中溝 それは昭和28年。総会の時でしょう。

岩崎 梅毒の宿題報告で、3年ぐらいみんなそれに加わって教室の総力を結集して頑張った。あのときが一番印象深いですね。よくまあ、顕症梅毒があんなにあったと思うけど。

利谷 あのときはタイミングがよかったんです。

岩崎 それから、九州じゅうの関連病院から、全部回してくれたし、まあ、皮膚科の病棟はほとんど梅毒で埋っておりましたもんね。そして顕症梅毒が見事に治ったのにもびっくりしたですなあ。それまでは、サルバルサン、マファルゾールですからね。

利谷 要するに抗生物質の治療法を導入したということですね。

岩崎 新しい抗生物質が出てきはじめてころでもあったし、旧来のワッセルマン反応に代ってカルジオライピンによる抗体反応もできなかったころですよ。だから、非常にタイミングがよかった。北村先生がペニシリン、占部先生がテラマイシンかな、坪井先生がクロロマイセチン、私がオーレオマイシン、それから皆見先生は血清反応という格好で、フル回転でしたね、あの3年ぐらいは。あのときは樋口先生もずいぶん張り切って教室員もかなりハッパをかけられましたよね。当時はミーティングを週に1回はやって、かなりたがを締められましたが、ずいぶん成果もありましたね。

利谷 そうですね。あれで西日本文化賞をもらわれたんじゃないかなって思ってますかね。

占部 いや、西日本文化賞はね、そのずっと後の抗療梅毒ですよ。総会のときは抗生物質による新しい治療ということでね、非常によかった。九大医学部の中央講堂で宿題報告をされてね、1時間50分ですよ。中央講堂は机が長いでしょう。入ったらもう出られんからね、坪井尚先生らは尿瓶を持って入って、あそこでスライドを映したんですよ。

中溝 僕は太村に学生で行ってるときには、樋口先生の仕事はマファルゾールを動脈血で溶かして、それを静脈に注射するというのが仕事だった。大分動脈血をとる稽古をさせられましたよ。そうすると副作用が少ないからね。

岩崎 皆見・樋口時代のころまでは、いかにして大量の砒素性駆梅剤を入れられるかということですよ。

利谷 大量に入れて、しかも副作用を少なくするというのが一番のテーマだったですね。

岩崎 それがペニシリンがあらわれてから夢のご

とします。それはもう凄い効果でしたね。その中で、今も忘れもせん患者が一人あって、梅毒性の丘疹、顕症梅毒のね、それが大分かどこかの尼さんでね、44、5歳で、れっきとした僧侶なんですよ。その顔だけ今でも覚えとるね。

占部 僕のところにも一人来たよ。直方かどっかのお寺の坊さんでね、82、3歳かね。立派な顕症を持ってる。二期じゃなかったかな。そして立派に治った。あのころは抗生物質は10日間しかやってない。テラマイシンを一日に2〜3グラムぐらい内服したんじゃないかなあ。大量で、いま考えれば恐ろしいぐらいよ。

中溝 大村にいるときに、大分膀胱鏡を稽古させられて、学生でもう逆行性腎盂造影ができるようになりましたね。だから、教室に入ったあとも使いやすいから、あっちこっち出されたね。ちょうど総会のときには松山に行けと言われましたよ。やっぱりあのころはウロができんとね。

岩崎 私も山口に行って往生したもん。富川先生がね、岩崎君は今度赴任するから、腎摘をやらうと言って、珍しく第一アシスタントをやらせてもらったけど、手伝うだけでしたな。やっぱりウロの手術経験が乏しいから、行って往生した。根本部長や安部先生に大分手助けしてもらったな。

中溝 あんたがウロをせんから、僕が行ってから出来んと思われとったが、ばんばんやったもんで、外科はびっくりしておった。

岩崎 けど、九大じゃもう腎結核の患者は激減していたが、山口ではまだ多くてね。毎月2、3人の腎摘をこなすので、だんだんうまくなった。九大のウロではやらせんやったね。

中溝 やらせんから、九大におったら上達しない。僕は外で勉強したからできた。山口県にはウロの医者がいなくてね、全部山口日赤に来たからね。ウロはよくやったよ。

旭 あのころの研究の大きなテーマが梅毒でしたが、もう一つの真菌の方は、皆見先生のころからやってはいるんですね。

岩崎 樋口先生は皆見先生からテーマをもらい、

太田正雄教授のところで手ほどきを受けて帰られてから、真菌も皆見先生のテーマになり、樋口時代も当然それが続いていました。ちょうど私のテーマが分芽菌だったんで、樋口先生の学位論文は私が一番詳細に読んだと思いますよ。福岡医学雑誌に掲載された論文は随分長編でエネルギーシユなものでした。それまで、皮膚の酵母菌（分芽菌）による疾患は、ゾールとか、腸からみつかる酵母菌とは違う由来のものではないかとして、それぞれ違う菌の名前をつけていた。それをどれも同じ菌種だということを確定されたのが樋口論文で、当時としては非常な卓見だったと思いますよ。やがて昭和20年代後半からその分芽菌は、カンジダ・アルビカンスの名前で統一されることになる。私が入局した頃は占部先生と坪井先生が白癬で、サブローの斜面から懸滴培養、巨大培養まで部屋中培養菌で溢れていました。ところが抗生物質の普及とともに、各科領域にわたりカンジダ症の発生が誘発される現象が注目されるようになり、当初東大の美甘教室から抗生物質は試験管内でも分芽菌の発育を直接促進するという説が出されたのを契機に、異論も続出して紛糾、たまたま分芽菌がテーマだった私にお鉢が回ってきて忙しいことになった。利谷先生や徳永先生、専攻生にも手伝ってもらうことになり、「抗生物質投与による交代菌現象によるカンジダ症の発生」であることを結論づけるまではかなり全力投球で、2年くらいかかりました。その産物が金原の皮膚科全書の真菌編に樋口先生と共著で出した「分芽菌症」として残りました。

占部 真菌の研究はね、先生は長い間久留米のときから続いてやっておられた。

岩崎 あのころは白癬の薬はなかったですよ。

占部 なかったですね。そして、昭和28年に樋口先生が宿題報告をされるということで、白癬や真菌の研究は一時ストップして、梅毒に移ったんですね。そういういきさつがあって、全員が総力を上げて梅毒をやった。

利谷 家兎梅毒というのは、僕は金だらいでもらいに行かされて、もらって帰ってきて、それで動物実験をやったもんね。

旭 宿題報告が終わってから真菌の研究が再開されたわけですね。占部先生が中心で、西尾先生も少し真菌をされていますね。私が入ったところは植松先生がやっておられた。それから原先生、その後、北村先生になるわけですね。

岩崎 北村先生は、テーマは何でやとったの。

北村 真菌です。学生時代の選択科目に医真菌学があったんですよ。脳外科、心臓外科といろいろあって、100人中その医真菌学は3人でした。昭和36年ころですが、西尾先生に基礎から全部教えてもらって、1時間ぐらい習ったあと、すぐ中洲に連れていってもらいました。昭和39年に入局したときに、樋口先生が医真菌学会を引き受けられて、クルズスをされたんです。その準備が大変で、あのとき助教授が皆見先生で、みんな図書室に呼ばれて、樋口先生からわしがおらんと準備ができないのかと怒られた。それでもう日曜返上で、当時ラボランチンの居石さんとかみんなで培地をものすごくつくりました。受講者にサンプル株を分けるのに、100人分ですから、一つの菌株を100本植えなくちゃいかん。それが14、5種類あった。それがまた雑菌が入らないようにしなければいかなので、あれは大変でしたが、入局早々それがすごく勉強になったと思います。

占部 あのと僕が久留米大学におったけど、大分加勢したよ。

旭 日数を逆算して、講習会の日にちょうどいい大きさのコロニーが育ってるように、しかも数をきちんと準備するというのは大変ですよ。

北村 あれで真菌学会の会員が増えたと言って、樋口先生がえらく自慢されとったけども、ああいふことは…。

旭 めったにやらないでしょう。

北村 できないですよ。占部先生はおやりになったんですね。

占部 やりました。あのこと3回やっています。九大で2回やって、千葉で一度やったことがある。あとは、なかなかやるところがなくて、最近はまだやっていますかね。

旭 樋口先生は形成外科にも興味をもっておられ

たようですね。

占部 昭和30年初めの頃、外科出身の佐藤一夫君を東京警察病院の大森清一博士のもとへやって、ダーマトームによる植皮術や皮膚剝削術を導入された。当時は、国立大学で形成美容外科に手をつけるなどとは邪道だと考えられていた時代ですからね。先見の明がありましたよ。

旭 残念ながら九大には、いまだに形成外科の講座はできていませんね。

中溝 学園紛争当時には樋口先生は大分苦労されたんじゃないかな。

北村 インターン制度反対ということから盛り上がってきて、いろいろあったんですけども、九大にジェット機が落ちたことがありましたね。あれは私がちょうど当直の日に、夜の10時ごろに病棟の詰所から見てたら、九大本学方面でドカーンという音がして、物すごい火花が上がったんですよ。恐らく何か理学部か工学部で実験の失敗で爆発したんだろうと思いました。やけどの患者がいっぱい来ると思うから、部屋の準備をするように指示して、そのころ重症のやけどをできるだけ入れようと言ってチームを組んでいたのですが、全然だれも来なかったですね。スカ食らったんですけども、翌日になって、無人の建物に無人のジェット機が落ちたということを知ったんですけど、あれがたしか、昭和43年の6月の2日なんですよ。そのちょっと後に、油症の患者の第1号が来ています。その前に、東京では日大の紛争とか、東大の紛争とか、いろいろあって、それが九大にも来て、学園紛争があって、医局の方も、ボイコットとか病棟の封鎖とか、研究室の封鎖があって大変でした。

利谷 占部先生も大分影響を受けられたでしょう。

占部 僕は充分あと、九大に戻ってからだ。

中溝 占部さんが来たときは、もう収まったあとだろう。

占部 いや、まだあったよ。僕が久留米におった時期に、例の学園紛争が始まったが、久留米大学では何もなかった。そして、何も知らずに九大に来たら、まだ外来に垂れ幕が下げてあるし、マイ

ク持って怒鳴って回わりよるし、立て札も林立しとるし、もう大変。

北村 あのところは無給医局員が研究診療ボイコットをやっていました。ただ、皮膚科はみんなおとなしいから、陰では手伝ってくれたんですけど、やっぱり大っぴらにはできなかったんで、利谷先生なんか一番苦労されたんじゃないですか。利谷先生がおられるから私らはすごく楽でした。そのころアレルギー学会を引き受けていて、先生と一緒に方々を回りましたですね。

占部 あの学会のときは、北村先生は本当に大変だったね。あの緊張した顔は忘れられん。退去命令を書いたプラカードを机の下に持って、いつでもぱっと出せるようにしておったね。

北村 あのアレルギー学会の前に、内科の学会があって、そのときかなり学会妨害があったんです。アレルギー学会にはいろんな科が入ってますから、どんな人が来るかわからないし、それは心配でした。アレルギー学会の理事会では、このごろの若い先生は何だ、老教授が学会するのに、どうして妨害するんだと言ってえらく怒られたことがあります。

利谷 樋口先生が会長を返上をされると言われて、進藤先生にお願いして会長を代わってもらったんですが、それはやめてくれ、樋口先生がそのままやってくれと有志の何人かがみえましたが、樋口先生は、私の気持ちは変わらないと言われました。

北村 その進藤先生の下におられた西岡先生が、事務も私が全部引き受けると言われたけども、われわれは渡さなかったんですよ、準備は九大でやりますと言って。最後に進藤先生は、私が一応代行でやるけども、これは樋口先生として記録に残すからということになりました。

それから、樋口先生に一番申しわけないことがあったのは、進藤先生が代行になるということをもマスコミがかぎつけて、ワースト医局長室にきました。いや、まだ決まったわけじゃないと言ったんですが、NHK だけは、夜 7 時のニュースのトップで樋口教授降りと出してしまった。マスコミ辞令みたいになって、すぐ樋口先生から電話がかかってきて、どうなってるんだと怒られたん

ですけど、NHK ともあろうものがという感じで、あれから私はマスコミは一切信用できないと思うようになりました。一たん出たら、もうどうしようもないですね。あれは本当に申しわけなかった。

占部 まあ、あそこは大変だったからなあ。ご苦労さまでしたよ、本当に。

北村 あのことの事を思ったら、今何をやっても別にどうということはないですね。あのときに研究室を封鎖されると、学会の資料が全部使えなくなるから、私のカローラのトランクに一切合財乗せて、樋口先生にはいつも助手席に座ってもらって、方々へ行きました。大学にもそれで行かないと、途中でつかまると団交になる危険がありました。あの当時の九大医報を見ると、大変だったなあと思うんですよ。例えば教授を十数名と学生との団交で、夕方 4 時から始まって延々 12 時間、それまで放してくれないんです。樋口先生もそれに入っておられて、もう教授連中が疲れてるからということで、やっと解放になったことがありました。樋口先生も学生から単独団交を申し込まれて、外来の広間のところで、きょう 12 時に団交と言われてると言われたので、教授秘書に団交がはじまって 30 分か 40 分したら、樋口先生に東京から電話ですと必ず言いに来いと言っておいて、その連絡が入ったとき、先生、東京から緊急の電話ですと言ったら、ああ、そうかね、じゃあ、電話がかかってるからこれと、すうっと出て行かれたことがありました。

中溝 当直で自分が注射もしたとか何とか。

北村 助手以上しかいないから、私が全病棟の患者を一人で持っていました。それから、外来で注射係りがいないと看護婦さんから言われたので外来に行っている間、病棟の注射を看護婦さんが樋口先生に頼んだら、僕は注射は永らくやっていないからできんよと笑っておられたそうです。

利谷 学年末試験で、点数はよかったが出席時間が足りない学生があった。1 週間 5 日のうち 3 日出席ならばいいんですが、それに足りない。そしたら、樋口先生が私のところにみえて、学年の参謀次長みたいな学生が来て、これでその試験を通

せと言っとるがどうするかと言われる。いや先生、もう事務に点数を出してしまったから、それはできませんよと言うと、困ったなあと言って帰られたんです。そしたら、本人が私のところへ来たんですよ。高下駄で、助教授室の中に入ってきたのを見て、これはもうやられたと思ったですね。そしたら、わしを知らんかなあと入ってきたから、出席日数が3日なら足りて、2日なら足りんということを説明した。それでも合格させるのが正しいものか、みんなに聞いてもらっちゃい。みんなが正しいと言ったら、私も引き下がらましようと言ったんです。すると、そのまま引き下がったんです。そこのところは学生らしいんですね。そのまま帰って、翌年再試験を受けましたが、再試験の成績は最高でした。

中溝 教授会のドタバタはジェット機が落ちたところがピーク。

北村 あのころは、教官も学生も一緒になってやってました。そのうちに学生の運動が激しくなって、とてもついていけなくなって、また教授会との間にいろいろあって、学会粉碎とか、医局制の粉碎とかいろいろ起りました。だから、昭和43年、44年、45年と、このあたりなんですね。ちょうどそのころに、アレルギー学会と油症とがありました。あのころは、新聞記者が医局長室の前にずっと張り込んでいて、部屋を出ると、今からどこへ行くんですかとついて来ました。あのときアレルギー学会が京都であって、九大の前年度の学会を見学せにゃいかんというので、利谷先生と一緒に行ったことがあるんですが、そのときも、今からどこへ行くんですかとついてこられました。毎日新聞も北村という記者です。アレルギー学会では樋口先生が、ナイターをやろうという案を出されて、普通なら懇親会のところを、7時から9時までシンポジウムを二つやったんですが、前評判では、そんなに来やせんよと言われてたけど、実際は会場いっぱいになって、10時になってもまだ終わらないんです。進藤先生が、北村君、若い奴らは一晩中でも議論するから、もうやめと言うてこいと言われて、そこでやめてもらったことがあ

りますね。あの学会も結局、私と助手二人ぐらいで、あと誰もいませんから、占部先生の久留米大学にもお世話になりましたし、鹿児島大学や日大の三浦教授とか、ほかの先生から、ぜひお手伝いをさせてくださいと言っていました。福岡県警の公安の人が、前日の夜、明日の学会は大丈夫ですと言われたので安心したんですけども、会場の西鉄グランドホテルの各入り口のところに二人ずつ刑事が張り込んで、司会の先生にも妨害の際の合図の札を渡して、何かあったらこれを出して下さい、そしたら機動隊が来てくれますとか、そこまで準備しました。

旭 東大は入学生がなかった年がありますね。九大はそれがなかったから、東大よりはその点よかった。

岩崎 あのときは、我々の目は東大に釘づけになって、九大がそこまでいってるとは知らなかったなあ。

北村 九大も紛争校に指定されていました。

旭 九大はジェット機が落ちたという特殊な事件がありましたからね。それでなお運動が拡大した。

北村 建物の上に落ちたジェット機を誰かが引き下ろしました。引き下ろされるまでは、学生運動の対象がジェット機に向けられていましたが、引き下ろされた後は大学紛争へと拡大した感があります。

利谷 放射線科の入江教授が学長さんのときですかね。

旭 学長代行になって、事態を処理されたんです。

中溝 彼が機動隊を入れようと決めた。そのあと革マルとか来てやられたよ。ちょうど部局長会議やっとなときにわあと来てね。大分やられた。何しろ教授会を大学の中でできないから、いつもホテルを転々と回って、きょうは高倉ホテルとか、朝電話がかかってくるんだから。ホテルをどんどん回って逃げ回った教授会ね。樋口先生に会うと、おまえきょう暇か、疲れたから今日は麻雀に付き合えと言われて、しょうがないから帰らずにつきあった。大分疲れておられたですね。

利谷 しかし、あのころも樋口先生は悠々としておられた。

占部 そうね、麻雀するし、クラブ「あざみ」にも行くしね、堂々としておられたね。

中溝 あのころはみんな、あざみを敬遠しとったでしょう。

岩崎 あの当時は、あざみはコントラになっていた。

北村 それから油症も。あれも昭和43年、一番初めに中垣先生が、整形の先生に何か変な患者があるから、ちょっと診てくれといわれたのが第一番目で、それを大分地方会に報告したのがありましてね。それから後、10月に、金沢で医真菌学会がありましたが、都外川先生から電話がかかってきて、奇病が発生したからすぐ帰れということで、樋口先生も帰って空港で記者会見をされて、そして、ああいう研究班をつくられたんですね。医学部長を中心にして研究班をつくるという対処をぱっとされて、やっぱり上に立つ人は違うなあと思いました。ああいう大事件にしては、非常に速く原因がわかったと思います。

旭 カネクロール中毒という結論を3週間ぐらいで出してますね。非常に速かったです。

北村 そのとき塩素じゃなくて砒素だという話がポンと出て、すごく窮地に立たされたことがありました。あの症状を見たら砒素とみるのが当然じゃないかという人があった。しかしあれは砒素じゃなくて、やっぱり樋口先生が言われたように塩素座瘡でした。外出から帰って来られた五島先生と旧外来の入口で出会ったとき「北村君、砒素説は完全に否定されたよ」と晴々とした表情で話されたことを憶えています。あの当時あれだけのことをちゃんと言われた樋口先生は偉かったなあと気がします。

岩崎 樋口先生があの段階で塩素座瘡と言われたわけですね。

北村 砒素はどんなところからも検出されるらしいですね。ライスオイルから砒素が検出されたとの報告が2カ所から出されたが、あとで単位がまちがっていたとわかったそうです。

岩崎 砒素はちょっとあり得ない。

北村 後になれば何でもないと思うんですけど、

あの当時、あれだけわあっとなってるときに、研究班を作って診断基準をつくり、疫学的追跡とか、びしゃっと一致したというのが凄い。あれだけマスコミにさわがれている中で診断基準をつくられた五島先生に敬服しています。

岩崎 大抵、慎重になって、結論出すのに時間がかかるが、世間の反応が大きいだけに、あれはすごかったね。

北村 私は油症のことを忘れていましたが、昨年、古江先生が日医新報に油症のことを書かれて、非常に不謹慎ですけども、えっ、まだ油症があるのかと思いました。今、新たな段階になってるんですね。

旭 あのとときは一応 PCB 中毒ということになりましたが、今は PCB だけじゃなくて PCDF、今でいうダイオキシン中毒の意味があるという新しい要素がクローズアップされてきて、またちょっと話題性が出てきています。そのことまで含めた新しい診断基準を出しました。診断の方ではそういう進歩があったけど、治療は相変わらずあまりいい方法がないんですね。

中溝 あのとときは治療法がないもんだから、樋口先生が、温泉でもやってみたらどうかと言われて、全部温泉に来たですよ、別府にね。大分引き受けたよ。

北村 私が医局長時代、樋口先生に一番教えられたのは、時間をきちっと守ること。それから、手紙の返事をすぐ書くことです。出張から帰られてもまず教授室で手紙の整理をしてから帰宅されていました。私は返事が延び延びになる方ですが、あれが本当に凄い。

岩崎 返事をすぐ書くというのは、見習わざるを得んようになって、私はもう習性化しましたが、そういう弟子は多いだろうね。手紙を読むとその場で返事を書かれたからね。普通はそれができるようで、できませんねえ。

占部 原稿も早かった。随筆集が4冊もあるんですよ。大変なボリュームで、そりゃすごい。

旭 ちょっと時間待ちがあると、カバンから原稿を出して、何行かでも文章を書くんですね。ぼん

やり時間を過ごすことをしない。そこがすごかったですね。

北村 よく勉強されてよく遊ばれたと思うのは、ウィークデーでも、昼から春日原までゴルフに行こうと言われて、先生が行かれるのはいいけど私は、と言うと、いや、ちゃんと仕事さえすりゃいいんだ、大体、遊びきらんやつは勉強もようできんと言われて行ったことがあるんです。

占部 それはよく学び、よく遊べだった。それをモットーにしておられたからね。

旭 遊びはゴルフと麻雀でしたね。それとロータリー活動、これがとても熱心だった。

占部 福岡ロータリークラブの会長をされたのち、昭和56年には270地区（福岡、長崎、佐賀）のガバナーにも選ばれました。正に将に将たる器でしたね。

北村 それともう一つ、「皮膚と泌尿」が分離する際に、雑誌の名前をどうするかという相談をしました。泌尿器科のほうは「泌尿」でもいいが「皮膚」は大阪にすでにある、それでどうしようかということになって、最終的に「西日本皮膚科」になりましたが、東京の先生から、余りにもセンスがないといってえらくけなされた。

岩崎 安田先生じゃないか。

旭 今から考えたら西日本皮膚科というのは、非常にわかりやすくていいと思いますけどね。

岩崎 ほかにつけようがないんじゃないのかなあ。

北村 阪大の「皮膚」は、「皮膚の科学」に変わりました。

岩崎 私らが入局したときは編集室に野間先生がいた。その後は占部先生でしたかね。

占部 そうです。私は久留米へ赴任するまで10年間担当しました。

岩崎 機関紙になるのはずっと後ですね。機関紙で九大が編集を全部面倒見たんでしょう。

旭 そうです。今もやっています。

岩崎 あれは古江教授が今は編集後記を書かれてるな。

旭 あれは代々九大教授が書くという慣例があるので、占部先生も堀先生も書かれました。

岩崎 そのころの在局者は何人ぐらい、どういう

メンバーなんですか。

北村 五島、都外川、矢幡先生がおられました。幸田先生は出られて、旭先生はおられなかった。

旭 僕は実験を習いに基礎へ行っていたときで、いませんでした。

北村 あと中垣、田崎、吉永先生ですが、田崎君はドイツに行っていました。あとは大学院とか。

中溝 樋口先生の退官のとき、利谷先生が助教授で、安田君が医局長だったね。

北村 私もまだおりました。

中溝 先生、おったかな。

北村 樋口先生がお辞めになってから、私は大阪に行きました。樋口先生がわざわざ大阪まで来て、馬場先生に頼んでいただいて。

中溝 樋口先生の退官祝賀会は盛大だったね。翌日のゴルフは、ゴルフ場を全部借り切ってやったね、20組ぐらい。

旭 樋口先生は、福大医学部の創立にもかかわっておられますね。九大退官のあと病院長になっておられるけど、その前から、設立にかかわっておられたんでしょう。正式の肩書きには出てこないけど。設立委員長じゃなかったですか。

利谷 学部長とね、病院長と、両方二つ兼任で最初はおやりになった、2年ぐらいですかね。

中溝 福大時代に樋口先生が、こんど学部長になったけど、学内に木がないから、木をどうにかしろと言われた。どうにかしろと言って、どうしますかと言うと、どこかへもらいにいこうやと言う。それで、指宿に九大の演習林があるから、見に行ってみようと思ったのはいいんだが、ゴルフばかりして、木なんか見ない。だから先生、木はどうしたんですかと言うと、そうだなあと言って、それで演習林へ行っ、これだけの木をくれと頼むと、運び代だけは出してくれ、そして九大から九大にはやれるが、福大にはやれんというので、僕がもらって温研に運ぶということになったが、実際はあの木は全部福大に行った。運賃が80万ぐらいかかった。

利谷 今でも育ってますね。

岩崎 創立の時代からもう30年越したから、もう大木になっとる。

旭 それでは座談会が始まって1時間半経って、
大体予定の時間になりましたので、そろそろ終わ

りにしたいと思います。本日はどうも有難うござ
いました。



中山、松田、日野
本房、旭、幸田

開講百周年記念座談会

— 占部・堀教授時代 —

出席者 | 幸田 弘（昭和34年卒）・日野由和夫（昭和47年卒）・本房 昭三（昭和48年卒）
（敬称略） | 中山樹一郎（昭和50年卒）・松田 哲男（昭和58年卒）
司会：旭 正一（昭和36年卒）

平成17年11月20日(日) ホテル・ニューオータニ博多

旭 本日は、お集まり頂いて有難うございます。これは、九大皮膚科の開講百周年記念で企画した座談会の第二部で、占部教授、堀教授時代の医局の思い出や裏話を、いろいろ話して頂きたいと思っています。

では、占部教授時代から入りますが、占部先生が久留米大学から赴任してみえたのは昭和46年の7月で、樋口先生の定年退官の4ヵ月後です。そのあと昭和62年3月の定年まで16年間おられたことになります。占部教授が赴任してみえたときに、医局にいた者は、この中にはいないので、赴任前

後のことが分りませんが、そのあたりを一番よく知ってるのは誰ですかね。

日野 末永先生が医局長でしたから、その過渡期は、末永先生、安田先生が一番詳しいでしょう。

旭 幸田先生が助教授に赴任された時の事情は、どんな風だったんですか。

幸田 私は国立福岡中央病院の医長だったんですが、末永医局長が私のところに来て、九大に来てくれないかという要請がありました。僕は全然そんな気持ちはなかったから、一たん断わったんですけども、いやぜひ来てくれと…。それで、あの

ときは学園紛争が終ったばかりの時期で、医局も大変困っておられた。じゃあ、2年間だけ受けさせていただきますという返事をしました。結局、昭和47年の6月に、助教授で医局に戻っています。そのとき日野先生はもう入局されていて、日野先生に頭を下げて、よろしくお願ひしますと挨拶した記憶があります。

旭 占部先生が戻ってみえて、九大のスタッフはあのとき、かなり手薄だったから、診療の中核として幸田先生に来てもらおうということで、末永医局長を派遣されたんだと思います。私も当時、歯学部で生化学に実験を習いに行っていました、声をかけて頂いて、また皮膚科に戻ってきました。だから、占部先生が赴任されたときは、私はまだいませんでした。

日野 いつ戻られたんですか。

旭 幸田先生より数ヶ月早かったと思います。そんなことで、新しいスタッフが少しできてから、第1回の入局者が日野先生たち、次の年が本房先生たちということになっていったわけです。

日野 僕のときは、学生紛争が終わって間もなくの頃で、どこに入局しようか、教授も新しく変わった所だと思って、皮膚科に行ったら、もうその日に医局長がちょっとおまえ、夜は暇かということ。

旭 非常に入局者が欲しかった時ですからね。医局長は末永先生ですか。

日野 その日に、占部教授と末永先生と三人で、某高級料亭に連れて行かれて、ご馳走になりました。

中山 僕は昭和50年ですが、僕とか今山先生とか、5人入りました。すごく喜ばれてね。教室員の少ないところだと驚きました。

旭 あの年は、入局者が多かったですね。

本房 日野先生は高級料亭と言われましたが、私は余りいい目に遭っていません。実は大学の成績もよくなかったんで、マイナーの科にしか行けないだろうという気がしてました。それで、皮膚科か、放射線科か、泌尿器科か、まあ、皮膚科でもいいけどと思ってたんですが、そういう話をしていたら、友達が占部先生の甥でしたので、その話

が漏れたらしくて、急に占部教授の家に連れていかれて…。一応歓待されたもんですから、抜けられなくなって、まあ、大事にしてくれるんだろうと思って入局したんですが（昭和48年）、最初は、大事にされたとはとても言えません。まだ占部先生も幸田先生も来られたばかりで、医局の中はまだ固まってなかったので、教育システムもはっきりしたものはなかったように思います。ですから、しばらくは放っておかれて、私の未来も暗いなと思ってたんですが、そのうちに慣れてくると、とても気楽な医局だという感じになりました。当時の医局長は末永先生から安田先生に変わった時ですが、私はかわいがられて、しょっちゅう医局長室に出入りしておりましたね。

松田 日野先生の言われた、占部家の毒入りのお酒というので入局が決まったんですか。

本房 僕は毒入りのお酒ではなかったんですが、一人で呼ばれたから、これは逃げにくいなと思いましたね。

日野 占部先生のお宅にはよく大勢で押しかけました。そしてお酒を飲みだすと、前の古い家のときは、建て付けが悪くて、でかいストーブがガンガン。ストーブに当たってるところはカッカカッカするし、横からはスウスウ風が入る。それで飲むから、結構効くといった状態でした。

本房 あのころは学生紛争の後で、僕ら同級生も、九大の医局のほかに、福大とか、ほかの大学に行った人もかなりありましたから、入局者は少なかったんじゃないでしょうか。

松田 私の入局のときも、私は教室出身者の息子で、皮膚科に入るのは当然だと思われていて、今山先生が医局長でしたが、たくさん連れてきたら、おまえは歓待してやると言われました。まあ、九大から5人、よそから3人、大量入局の年で（昭和58年）、たくさん人がいると、みんなの目が届きにくいということで、多少、行動の自由がありました。

旭 入局者の数は、年度によって変動が大きいですね。僕なんか非常に少ない時期に当たりました。上に佐藤先生がいたんですが、薬理に行つて事実上いませんでしたので、2年間に僕一人という、

非常に少ない人数でした。

本房 そうすると、スライドの整理とか、ずうっと一人でしたか。

旭 何やかんや雑用がみんな来ますから、そういう点では大変でしたね。

百周年の地方会会場のパネルに旧研究棟が出ていましたが、占部先生がみえたときは、まだあの旧研究棟にいました。中央病棟が昭和40年、総合外来が昭和43年の移転だから、占部先生の赴任時は、もう外来と病棟は移転しており、研究棟だけ旧皮膚科の形で残っていて、ウロと同居していました。占部先生がみえて4年たった昭和50年3月に、いよいよ研究棟の移転になって、そのときはドタバタ大変でした。

中山 それがちょうど、僕らが入局した年になりますね。

旭 あのときは本当に戦争でした。開講以来の入院・外来のカルテまで含めて、大変な量の荷物を運びました。

本房 移転は大変でしたね。荷物の運搬、片づけなんか。

旭 ムラージュだって、すごい数でしたが、全部置くスペースはないから、減らさざるを得ない。どれとどれを持っていくかという、その選別だけでも大変。

幸田 引越しは医局員だけでやったのかなあ。

旭 ほとんど医局員だけだったと思います。

本房 そうです。倉庫にあるいろんなものも運ばれました。重かったのは教授室の金庫ですね。機械を使ったのは、医局長室の大きな金庫。あとは人力でした。僕らは下っ端で、重いものの運搬ばかりさせられました。

日野 僕はあのとき大学院で、ウイルスに行っていたから、結構サボってましたね。

本房 今になると、古い建物も懐かしいですね。ただし余りきれいとは言えなかった。

旭 本当は立派な建物で、たとえば隣の耳鼻科の研究棟よりも贅沢な造りなんですけど、なにしろ古いから、もう汚くてね。

本房 古いのはいいんですが、ヘビが出没していましたよ。

日野 2階の住人と下の住人と、格差がありました。教授室、助教授室、講師室、医局長室が2階で、2階に呼ばれていくときは、大体ろくなことはなかった。

本房 要するに1階は、助手以下の部屋と研究室、2階は管理職の部屋と「皮膚と泌尿」の編集室です。

旭 占部教授が虫垂炎で手術されたのは…。

本房 あれは移転の前後じゃなかったですか。

日野 安田先生が薬を持って行ってましたね。

旭 2度入院されましたね。後のほうは、大腸憩室ということでした。

幸田 話が変わりますが、占部教授は、「西日本皮膚科」の編集後記に、16年間教授として勤務して、退職金が800万しかないと書いておられますね。

日野 僕も医局長のころに、給与計算で、全員の給料袋を開けて医局費その他を天引きしたりするでしょう。だから医局のみんなの収入は、医局長が一番よく判るわけですが、教授の給料は安いですね。医局員でネーベンに行ってる方が、教授より収入が多いということもありそうです。

旭 私の祖父（初代・旭教授）の時代などは、朝晩の通勤に自家用の人力車があり、その車夫が屋敷内に住み込んでいたといいますが、昔とは大変な違いですね。

旭 このへんで話題を変えて、診療の方は何かありませんか。占部先生時代に、診療の方で新しいことというと、形成外科を始めたことがありますね。東京労災病院の倉田先生のところへ教室員を国内留学に出したり、倉田先生が毎年来られて、特別診察・模範手術・講義をされるようになりました。

日野 そのあと、形成外科を専攻する和田先生が入局してきました。

旭 和田先生は、慈恵医大の形成外科で数年のトレーニングを受けて、そのあと九大に来たんですね。

幸田 人事のことを言いますと、昭和47年の3月

末で、利谷助教授が福岡大学教授に転出されています。

旭 だから、占部先生が赴任されたときは、利谷先生が診療の責任者になっておられたわけですね。

幸田 そうです。だから、利谷先生のあとの助教授に私が…。

日野 西尾先生が来られたのは。

旭 西尾先生はその前に、一応辞めて非常勤講師になって、自宅の西尾医院をやっておられたわけですが、産業医大ができるというので、あそこにぜひ西尾先生をと、占部先生が運動された。そして、開業医のまま産業医大に行くのは無理だから、一たん九大に戻ってということで、西尾先生が講師で戻られて、そこから産業医大に赴任された。だから一時は、教授・占部、助教授・幸田、講師・西尾となっていた時期があります。

幸田 皆見省吾先生が亡くなられたのが50年ですね。昭和50年の9月6日。

旭 その翌年の昭和51年に日皮総会をやってますね。占部教授は、学会を何度も主催されましたが、これは大変だったというような思い出はありますか。日皮総会の時も、みんなでずいぶん働きましたね。

本房 やはり、一番は皮膚科学会総会でしょう。九大だけではなくて、久留米大学の先生方も協力するという格好で、学会場の運営に参加して頂きました。

日野 あおのときは、第2会場は久留米の先生にスライド係りとか何かをお願いして、第1会場は九大でやろうというふうに分業しました。Graciansky 教授の特別講演は大変でした。事前にフランス語の講演原稿を肥田野先生に訳していただき、それをもとに要約した日本語のブルースライドをつくり、2面映写でまあ、同時通訳のような形にしました。もちろん私たちはフランス語の講演はわからず、当日のスライド係の横に肥田野先生が控えて、指示をいただきました。

旭 私の思い出で一番大変だったのが、昭和56年の第2回の日韓です。事務局長をしたせいもあるけど、それは大変でした。

本房 それは皆さん、やはり自分が責任者となる

と、一段と大変でしょう。

日野 自分が医局長の時が一番きつかったのは真菌学会総会と、それに続いて75周年の記念学会。真菌学会の時は3日間のクルズスがあったので、その準備が大変でした。

旭 日韓のときは、兵役の関係とかで、参加を申し込んだ韓国の先生で、だれが本当に来るのか、当日になっても判らない。あとで聞くと、出国許可が出るかどうかは、当日、空港にパーミットが届くかどうかで初めて判るという驚くべき話で、来てみたら、エントリーした人の半数もいないんですよ。つまり出国許可がおりなかった訳です。そしたら、ホテルの予約で物すごい人数のキャンセルが出る。それを謝ってまわるという、そんなことだけで僕はもう大変だった。韓国の人はそんなことは判らないので、別に迷惑をかけたとも思っていない。裏ではそういう大変なことがありました。

中山 今年、熊本で日韓をやりましたが、韓国から160名以上の参加があり、日本の方が少なかった。それで韓国の先生は、かなりとまどっておられたようでしたね。

旭 ただ昔は、観光気分で来てる人もかなりあるという印象を受けましたが、最近はどうでしょう。

中山 いや、最近はそうでもないんですよ。参加者が若くて、ポスターも沢山出してあります。日本のほうが少し、腰が引けてると言ったら悪いけど、そんな感じですね。

松田 入局したときは、まだ日韓で配ったコングレスバッグが沢山あって、みんなそれを使っていました。

本房 新三浦で懇親会をしたでしょう。あのときに、日本人と韓国の人とちょうど半分ずつ並べるように配置したという記憶があります。

松田 座席表をつくるのに、ご夫婦を並べるのが、夫婦の姓が違うという習慣のため、えらい苦労したという話がありますね。

幸田 本房先生はそのときは留学中ですか。

本房 日韓は、私が米国留学中のときでしょう。全然記憶がありません。

幸田 日皮総会のときに、占部教授が企画した大

きなことは、一つは東南アジアからのスピーチのセッションをつくったことですね。東南アジアから先生方が参加されるようになったのは、あれ以後じゃないかな。それと、もう一つは、一般演題の発表時間を全部15分にした。その代わり演題数をしぼらねばならないので、各セッションの座長の二人の先生に抄録を送って、各演題に順位をつけてもらって、発表演題を選択した。

本房 あれは初めての試みだと言われてましたね。

幸田 一題を15分にして、ディスカッションの時間を十分にとって、ほかの演題は全部展示にしました。それからあのときに、レディースプログラムが始まったんですよ。韓国からは夫妻での参加はまだ出来なくて、男性だけでしたね。韓国からは金永杓先生が来られました。

日野 そういう事から、日韓皮膚科学会の話が出て来たんですね。そして第1回が韓国、第2回は博多で開催することになったんですね。

本房 私は真菌をしてみましたので、真菌学会も結構大変だったという印象を持っていますが、全体的には、やはり日本皮膚科学会の総会が大変だったんじゃないでしょうか。

日野 そのころの手帳を見てみると、やっぱり本房先生と下調べに、よく飲みに行ってますね。

本房 幸田先生が来られて、医局になじまれてからは、夜は医局でよく酒を飲んでいましたね。

日野 総会の前の年ぐらいから、総会の準備ということもあって、よく集まって、そうすると酒になるし、じゃあどこかへ行こうということになることも多かった。

本房 1週間で医員の給料がなくなりましたもんね。割り勘でやってたら、僕らはぺえぺえだったから、金が全くなくなってしまった。

旭 樋口先生の時代は、麻雀が結構盛んだったけど、占部先生の時代になってから、教授がやらないせいもあって、医局の麻雀がなくなりましたね。

本房 そうです。麻雀よりも酒でした。

幸田 やっぱりボスがやるものになるからね。

本房 占部先生もお好きでしたし、幸田先生がまた好きで、西尾先生も嫌いではなかった。そのほか好きな人間がいっぱいいたので、酒を飲まない

旭先生なんかは、居心地が悪かったんじゃないですか。

旭 西尾先生が産業医大に赴任したあと、ちょくちょく九大に顔を出しては教授室に入っていくわけですよ。そうすると、間もなくお二人で出てきて、その晩は飲むということがよくあった。仲がよかったですね。

日野 正月には、占部教授宅に集まって、それから、何かあるとすぐ自宅に呼ばれて、酒が出ましたね。僕が一番ひどい目に遭ったのは、3年目かな、大学院に行けと言われて、自宅に行って飲まされました。奥さんにどんどんつかれて、わかりました、大学院に行きますと言って、玄関を出た途端にひっくり返ってしまいました。

本房 あのころは、正月は一日から占部教授のところで新年会でしたね。私はそのあと空港で寝てしまって、鹿児島行きの飛行機乗り損なったことがあった。

幸田 占部先生ところの、年始のときの樽酒は、あれはいつからですかね。

本房 樽は、家を新築されてからですよ。古い家のときは、みんなが座れるスペースがなかったんです。

日野 だからその頃は、ばらばらに年始に行く人はあったでしょうが、ああいうふうには医局員を、全員来いというような形ではなかったと思います。新築してから、それが出来るようになって、真菌学会とか、日皮総会とか、小児皮膚科学会の時の懇親会で樽酒をやって、その時の榊がまだたくさんあって、正月にも榊酒が出ました。

旭 日本人は、仕事の客を自宅でもてなすということをあまりしませんが、占部教授は、国際学会のときなんかでも、懇親会の後は自宅に皆さんを呼ぶということを、しょっちゅうしていましたね。ああいうことの積み重ねが、国際親善にはかなり役立ったと思います。

旭 酒席の歌のほうはどうですか。占部教授も、時々は歌われましたね。

日野 「湯島の白梅」とかね。

旭 結構きちんと歌って、音程も正確なんです、

ただ持ち歌が二、三曲しかない。「氷雨」と「湯島の白梅」、そのくらいじゃないかなあ。

日野 一番おもしろかったのは、西尾先生と二人で唄って踊る「どんぐりころころ」ですね。

旭 あるとき、占部先生が、きょうは「影を慕いて」を歌うと言われたので、オッ、レパートリーが増えたと思ったんですが、歌い出したのを聞いたら、「宵闇迫れば…」。「影を慕いて」じゃなくて「君恋し」だった。

旭 飲みごとのほか、あまり遊びごとはなかったですかね。

本房 遊びごとは余りなかったですね。あとは、医局対抗野球ぐらいでしょう、弱かったけれども。

旭 野球は全然駄目だったね。

本房 それでも一勝したことがありましたよ。

旭 医局対抗野球があるからというので、練習してみると、みんなの下手さ加減に呆れかえるような状態でした。

本房 あのところは、腕よりも口の方が達者な人間が多かったからじゃないですか。

旭 医局員が少ない上に、女医さんが多いので、動員可能な人数が少なく、9人揃えるのが大変という状態だから、無理もない所もありますが、それにしても下手で、信じられないような珍プレーが続出しました。

本房 野球がお好きだったのは次の堀先生でしたね。だから、堀先生は怒っておられましたね。

旭 堀先生は野球部出身で自信があるのに、皮膚科が弱いから口惜しかったんですよ。

本房 そうです。医局員の下手さ加減に怒っておられました。私もいい歳なのに、君も出たまえとか言われて、練習なんかで往生しましたね。

旭 僕の自慢話は、医局対抗野球で、試合開始の直後にヒットを打ったら、そのあと全員が凡退してコールドゲームで負けた。つまりそのヒット1本で、チームが完全試合の屈辱から救われたという、変なヒーローになったことがある。

本房 スポーツの面では、あまり芳しいことがなかったが、それなりに楽しい思い出ではありますね。

旭 ただ卓球では、上田先生とか土井先生とか元部員の女医さんがいたので、女子をポイントゲッターにして、医局対抗の卓球大会で準決勝まで進出したことがありました。多少とも勝った記憶といえ、あれくらいですね。

日野 夏に、津屋崎に海水浴に行った時期がありますね。本当に泳ぐのは、占部先生と奥様と、あと何人かくらい、あとはもう、着く前のバスから飲んでばかり。占部先生は、家族的な雰囲気がお好きなようでした。前任地の久留米がそうだったんですね。

本房 津屋崎の海水浴も、そういう意味の企画でしょうね。

旭 占部先生時代の大事なことの一つに油症がありますね。油症研究班の班長は、樋口先生もされたし、後で堀先生も長くされたが、占部先生ときは、支援団体が押しかけたりして、騒動が多かった時代で、一番ひどい目に遭ったのは占部先生でしょう。あのときは、幸田先生が助教授で、下でやってたから、いろんな目にあったでしょう。幸田 そうですね。いろいろありました。

旭 講義中に、講義室に乱入してきて団体交渉が始まるとか、物すごいことがあった。

日野 そういう時、占部先生は慌てませんでしたね、本当に。

幸田 慌てても仕方がないんだという覚悟みたいなものがありましたね。

旭 それでは、堀教授時代の話に移りましょうか。堀先生の赴任前後の中心人物は本房先生かな。

中山 あのところ、僕は医局長をしてたんですね。

本房 いや、赴任されたときは、私が医局長。

中山 本房先生は、まだ佐賀大学におられたんですね。占部先生の退官と同時に選考委員会が始まって、そのころ僕が医局長で、いろんなことがありましたよ。堀先生に決定してから、本房先生が佐賀から戻って、医局長でずっと頑張られた。

本房 私が医局長になって、8月に堀先生に決定して、8月の末に一度奥様と来られました。

旭 堀教授は昭和62年の10月に赴任しています。

本房 その前の8月か9月に、九大の医局を訪ねられて、たしか自遠会の教授の先生方をあいさつ回りされました。私がついて回りましたが。

旭 堀先生は、自発的に九大に応募したわけではないそうですね。占部先生が応募して欲しいと強く要望されて、それならということで書類を出して、学内の審査を経て堀先生に決定した。

中山 東大の教授選考でも、様々な事情から東大に戻れなかった経緯があり、そういう事情を占部教授が詳しくご存じだったので、それでは九大の方にどうだろうかと考えられたんじゃないでしょうか。

本房 堀先生が来られたとき、東京から新しい任地に来られて、かなり気を使われていたと思いますね。

中山 助教授の旭先生のことを、すごく気にされてましたね。

旭 あの時私は、産業医大の教授選考に書類を出していたんですが、産業医大の教授会のメンバーに対して、電話や手紙で強力な援護射撃をして下さったようです。決まった時は、たいそうご機嫌でした。私が、よく選んでもらえたと弱気な感想を言ったら、いや当然だよと、とても強気なことを言われたのを憶えています。とにかく、事に当たって、いつも強気というか、リーダービリティの非常に高い人でした。統率力がすごかった。なるほど九大は、この人にかじ取りを任せるのが正しいと実感しましたね。

本房 ただ、博多の土地に慣れるのに、少し時間を要したようです。やはり東京と福岡の気風が違いますし、慣れるのに大変だったみたいですね。

日野 気っ骨がいいというか、気ぜわしいというか。

本房 そう、いわゆる江戸っ子タイプ。だから、結構きついことも言われましたけども、後で気にされてましたもんね。それで、けっこう面倒見がよかった。私はかわいがっていただいたけど、怒られた人もあったし、かなり面倒見てもらった人も多いと思います。うまくいってない人でも、後のことを気にされてましたもんね。

旭 強気な人だけど、決して無神経じゃなかった

ですね。

本房 いろんなことに気を使っておられたと思います。

旭 ある学外の人からね、堀先生が九大で疎外されて、外来もろくに診られないと、まるで村八分みたいな事を言うのを聞いて憤慨したことがあるけど、そういう事実は全くなかった事を言っておきたいですね。堀教授に対して、同門会からの圧力など一切なかったと僕は思ってるんですけど、どうですか。

本房 以前は、新患はみな教授診察というのが原則だったけれども、それを改めようと言われて、変えられましたもんね。だから、それは堀先生が決められた方針です。

旭 それは今度の古江教授もそうだけど、自遠会や医局からの圧力なんかは全然ないはずですよ。大学によっては、そういう派閥的なあれこれが随分ある所もあるように聞きますけど、九大では、そんな事はまるでない。

本房 ただ、気持ちの問題になると、気を遣う面は、やっぱりあったんじゃないですか。お互いの関係が気まずいということはなかったと思いますが、同門会の先生には気を使われました。会合には必ず顔を出されましたもんね。

日野 堀先生が来られたときに、北九州で飲み会に行くときに、渕先生に僕が平気で、渕、渕と敬称をつけないものだから、日野君、渕先生は君の先輩だよって叱られました。

本房 それは私も言われた。そういうことに奇異な感じを持たれていたと思う。福岡の地になじもうとされていたことは間違いない。だから、初めは部屋を借りておられたけど、結局土地を買って家を建てられましたからね。

旭 堀先生も幾つか学会をされたけど、もちろん日皮学術大会もされましたね。あれが一番大変でしたか。

中山 そうですね。あのときは僕が事務局長でしたからね。だけど、実は私は形だけの事務局長で、堀先生が自分でほとんどの事をなさったんです。堀先生は本当に大変だったと思いますよ。僕は名

前だけだったような気がしますね。

旭 たしか研究皮膚科学会もしましたよね。

本房 あのかは私が事務局長をやりました。ただ、あの頃までは、学会も金集めも以前の九大のやり方とそんなに差がなかったような気がします。

旭 僕は出なかったけども、色素細胞学会もありましたね。

中山 あれは、たしか日航ホテルでしたか、色素細胞に関しては、当時臨床的には堀先生が日本の第一人者で、外国からも大勢の方が来られました。色素細胞学会は、それほど派手な学会じゃないんですよ、基礎の先生方も来られるわけだし。わりに地味に運営したような感じがします。

本房 研究皮膚科学会はそれほど派手な学会ではなかったですね。

日野 学会自体は昔よりも、学会そのものを重視してやるという態度でしたね。

本房 そんなに金をかけないで、とね。研究皮膚科学会を主催されることは、九大に来られる前に決まっていたんですね。だから、研究皮膚科学会をやらなきゃいけないということを、来られて最初に伺いました。

幸田 堀教授は、ゴルフはされたんですかね。

旭 ゴルフはされましたが、どれくらいお好きだったかはちょっと。

本房 いや、大好きだったんです。私も何回か一緒に回わされましたから。

旭 野球は大好きだったけど。

本房 いや、野球もゴルフも大好き、運動は大好きだったんです。ただ野球で、どうも医局員が、笛吹けど踊らない、これを憤慨されていた。

旭 医局対抗野球で全然勝てないということが、口惜しくてたまらない様子でしたね。

本房 そう。それで練習をしようというので、動員をかけられたんですが、それでも教室員があまり動かなかった。

松田 メーカーさん相手に何回か練習試合、それでも全然うまくならない。

本房 そのうちにあきらめられたみたいですね。しかし、たいそう憤慨されてましたね。

松田 野球は、観戦のほうもお好きでした。医局でずっとテレビを見てらっしゃることもあるし、福岡ドームにもしばしば行かれました。

旭 日皮総会のときに、日本を4地区に分けて、地区対抗の野球試合を企画して、福岡ドームを借りてやりましたね。ただし、時間の都合があるらしくて、早朝5時とか、馬鹿に早い時刻に試合開始。

松田 その日はプロ野球の試合があるので、プロ選手の練習開始の前に終わってなくちゃいけないと言われて。

旭 そしたら、見事に西部支部が優勝したというので、これはちょっとご機嫌だった。

松田 あのかは、始球式しかお出になってないんですよ。本当はバッターボックスに立ちたかったと思うんですけど。

本房 たしか堀先生のときに、医局旅行もなくなったんですよ。そのかわりに、福岡ドームで懇親会みたいな格好になりましたでしょう。

松田 医局旅行は、海ノ中道ホテルでやったのが最後で、その次の年はディナークルーズで博多湾を回るのが医局旅行の代わりになって、その後は福岡ドームで野球を見ながら楽しもうということになりました。古江教授が来られて、また医局旅行が復活したんです。

旭 堀先生は、定年の時に3月より少し早目にお辞めになりましたね。たぶん院長に就任予定の飯塚病院からの要請だと思いますが。それで結局、在任期間は9年余りということになります。

中山 11月23日の開講記念日の地方会が、ご退官の記念の学会になりました。

日野 堀先生の退官記念の福岡地方会は、その翌週にあった西部支部大会よりも沢山の人が来てたんじゃないかというようなことも言われました。

本房 退官記念が盛大に行われたのは、堀先生あたりが最後じゃないですか。その後、そんなに退官記念会はなかったですよ。

中山 そんなにたくさん来られたというのは堀先生の人徳でしょうね。

日野 あのかは、堀先生は日皮の理事長だったんですよ。

旭 占部先生は、日皮の理事その他で、非常に忙しくて、ほとんど毎週東京に行っておられた。「西日本皮膚科」の後書きに、年に80回飛行機に乗ったと書いてあったが、堀先生も結構忙しかったでしょう。

本房 そうです。80回どころじゃなかったと思います。

中山 堀先生もよく行かれたですね。

旭 理事長をすれば忙しいね。会合も増えるし。

本房 だから、臨床部長会にあまり出ておられない。私がいつも代わりに出た。

日野 僕も占部先生の代わりに臨床部長会に出ていました。

松田 堀先生は、最初は単身赴任でしたね。食事もめったに自宅で食べなくていい、大抵会合があるからと言っておられました。

旭 博多弁にかなり引っかかるみたいで、「言わっしゃった」とか、「書かっしゃる」とか、よく真似してましたね。

本房 回診のときに博多弁の通訳をしました。

日野 食べ物にはいろいろ不満があったようですね。ソバとトンカツがおいしくないとか、ウナギ

が甘すぎるとか。

幸田 堀先生は余りお酒は飲まなかったでしょう。

本房 酒はお好きじゃなかったけれども、宴会が嫌いというわけじゃなかった。

旭 堀先生がカラオケで歌ったことはあるの。

中山 一度韓国で歌われました。その時、奥さんも一緒におられたんですが「長崎は今日も雨だった」を歌われましたね。医局の飲み会でも「長崎は今日も雨だった」を2回ぐらい。あの歌はよく歌われましたね。

旭 堀先生が来られてすぐ、医局の歓迎会をやったとき、会場のカラオケで、僕が「珊瑚礁の彼方」を英語で歌ったら、おお、やりますねえと言って、堀先生も何か英語の歌を歌われましたが、あれは、つきあいで無理したのかな。

本房 あときはね、医局員もそうだけど、事務の方とか、みんなについて回られたでしょう。一人一人に。やはり気を使っておられましたね。

旭 それでは、いろいろなお話が出ましたが、予定時間も過ぎたので、これで座談会を終わりたいと思います。本日はどうも有難うございました。